

## 作業選択意思決定支援ソフト（ADOC）を使用したことによって、 退院後の活動・参加レベルが向上した症例

<sup>1)</sup> 永生病院 リハビリテーション部  
○上野繕広(OT)<sup>1)</sup>，野口 僚子(OT)<sup>1)</sup>

【目的】生活行為向上マネジメントの推進など言われているが、患者様の心身機能だけでなく活動と参加が重要だと言われている。しかし、入院中の患者様に対して活動と参加についての目標を聞くが具体的な回答は得られにくい。今回、作業選択意思決定支援ソフト（以下：ADOC）を使用したことによって、患者様の目標を聞き取ることが可能になり、退院後の在宅生活で活動と参加レベルが向上した症例を経験したのでここに報告する。

【症例】年齢 80 代の女性。診断名は右大腿骨転子部剥離骨折。既往歴は腰椎圧迫骨折、腰部脊柱管狭窄症があった。右大腿部に痛みが強く、立位を伴う ADL で介助が必要だった。また過去に多数の転倒歴があり『また転んでしまった。』『なんで私ばかり』と悲観的なコメントが多く聞かれた。介入初期ではリハビリとして立位を伴う ADL 訓練を行ったが『痛いから動けない』と、日中はベッドで寝ていることが多かった。また今後の活動や参加についての目標を聞いても『痛くなければいい』とコメントするのみであった。

【方法】ADOC を使用し参加や活動についての目標を聴取した。聴取した目標課題を実施し、困難な場面があった場合にはその都度、担当作業療法士（以下：OT）が介助・代償方法の提示を行った。

【経過・結果】ADOC を使用することで 2 つの目標を挙げることができた。1：調理がしたい『家ではコーヒーを毎日飲んでいたので、だからまた飲めるようになりたい』『食器を洗うのを毎日手伝っていたの』とコメントした。2：手芸がしたい『手芸が昔から好きで、色々な人にあげていたの』とコメントした。

立位訓練では 1～2 分で『痛い』と座っていたが、調理訓練場面ではコーヒーのお湯が沸くまで立位で待ち、計 30 分立位保持が可能だった。また『立っているのは痛くなかった』とコメントした。ネット手芸は最初はリハビリで練習し、自主トレに促した。その結果一日中行い、ベッドで日中寝ていることがなくなった。

退院時には患者様が家族や介護支援専門員に『家でまたコーヒーが作りたい』『今まで行っていたデイサービスじゃなくて、料理と手芸が出来るところがいい』とコメントした。その結果として毎日コーヒーを自宅で作り、料理と手芸が出来るデイサービスに行くことになった。退院 1 か月後には、すいとんをデイサービスで調理し、退院 3 か月後には手芸を他利用者にプレゼントした。

【考察】入院中の患者様に対して、ADOC を用い目標設定を行ったことで、それまで OT には話さなかった事柄を話しながら、目標を設定することができた。また夢中になれる目標を共有することで、患者様自身が活動の必要性を感じ、家族や介護支援専門員に必要性を伝え、退院後のサービスを適切に選択できたと考えた。その結果退院後も活動性が高い状態を維持できたと考えた。